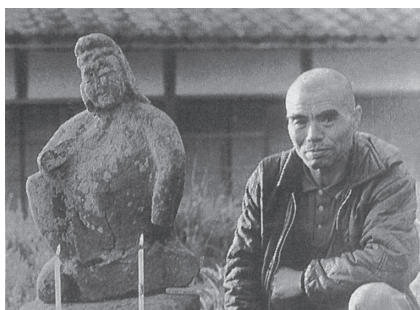


美術講座
ストーブを囲んで

横山拓衛さんを語る

日時…令和七年十一月八日 十三時半～十五時
会場…礫山美術館内 グズベリーハウス



なまくら観音と横山拓衛さん

館長…今年のストーブを囲んでの会は、亡くなって五十年の節目を迎える横山拓衛さんを語る会を企画いたしました。横山さんは本当に、礫山美術館を愛してくださった方で、来館者の方にも欲得なく誠意を持って接していただきました。未だに受付をやってますと、横山さんのことを懐かしがって語ってくださる方が、数多くいらっしゃいます。ホームページでも横山さんとの思い出を募集しましたら、多数横山さんのこ

とを投稿していただきました。白井吉見さんや、草柳大蔵さんなど著名人の方も横山さんを愛し、文章にも書いてくださっています。私たちも、微力ながら、横山さんのように礫山美術館に来てくださる方に接しなければいけないと常々思っております。今日は皆さんの思い出を共有して、語っていただきたいと思えます。よろしくお願いいたします。

武井…館長ありがとうございます。今日の司会を務めさせていただきます

武井と申します。よろしくお願いたします。今日の簡単な流れでございますが、横山さんとの思い出をご投稿くださいということで、すでにご投稿いただいてこの場には来られてない方もいらっしゃるの、その方の思い出を私の方からまず最初に代読させていただきます。その後この会場の中にいる方々それぞれの思い出のお話をいただきたいと思えます。それでは、今日お配りした資料、略年譜ですとか、色々ございますけど、皆さんお手元をお持ちでしょうか？ お持ちでない方は受付の方にありますので、お取りください。それでは思い出をいくつか発表させていただきます。

情報ご提供者様は、イニシャルですけれどもKr様です。

「礫山美術館の横山さん」

私が初めて礫山美術館を訪れたのは、一九七五年、昭和五十年九月のことでした。その頃は、礫山館とグズベリーハウス、そして付属館のみだったような気がします。その付属館に、横山さんの姿がありました。オルガンを弾いていたと思います。もしかして、言葉を交わしたかも知れません。

私が訪れた時、誰かが「先生が見えた」と横山さんを呼びに来て、何処かに行ってしまった。その後、先生とは草柳大蔵氏であると知りました。「礫山美術館にどうして草柳大蔵氏が見えるのか」と思った事を覚えていきます。これが横山さんとの出会いでした。

昨年、礫山美術館報四十四号の中にある写真を見て、「私はこの方に出会ったことがある」と思いました。私の臙げな記憶の中の横山さんと重なりました。私が初めて訪れた時の栞にも、「横山さん」の名が書き添えてありました。一度だけの出会いでしたが、気骨のある存在感のある横山さんでした。礫山美術館を介して、人と人が出会い、繋がりながら、

過去から現在、更に未来にも続いて行くのでしょうか。今でも横山さんが、碌山美術館を見守っているような気がします。

続きましてイニシャルですけど、m d様です。

およそ五十年前、東京都立昭和高校の林間学校で、碌山美術館を訪れた時、オルガンで信濃の国の弾き語りをしてくださいました。懇切丁寧な信濃の国の歌詞の解説もして下さり、県民ならずとも、郷愁溢れるこの歌が心に残る歌となりました。その後私は長野県出身の夫と出逢い、県民となり、二人の子供たちは学校で習った信濃の国をスラスラと歌います。不思議な巡り合わせを感じています。

続いてのご提供は、所美佐様です。

私が名古屋の中学二年生だった一九七四年の夏、学校の美術部のスケッチ旅行の行き先が碌山美術館でした。人数不足で集められた、美術部員でもない部外者の私でしたが、部員とともに美術館に一日滞在してスケッチしていると、優しくそうなおじさんが人懐っこく声をかけてくださったり、サモワールのお茶をすすめてくださったりしました。それが横山さんでした。たくさんおしゃべりしたわけではありませんが、私にとって横山さんご自身が碌山美術館の象徴になりました。碌山の彫刻の素晴らしさを知ようになったのは、その後でした。

大学生になった頃でしたか、美術館を訪ね、おじさんが亡くなられたことを知りました。中学時代のスケッチ旅行が今に続く碌山美術館とご縁になり、その後数年に一度は必ず美術館を訪れるようになりました。訪れるたびにグズベリーハウスにオルガンがあるのを確認し、「おじさん、また来たよ」と、横山さんを偲んでいます。

今回HPでこの投稿の機会を知りましたので、ささやかな思い出を送

らせていただきました。中学生だったあのとき、美術部員でなかった私がスケッチ旅行に誘われていなかったら、碌山美術館とご縁はこれほどなかったかもしれません。不思議なご縁です。碌山美術館をスケッチ場所に選んでくださった美術部の先生にも感謝しています。そして碌山美術館を思うとき、今もかならず横山さんのことを思い出します。

続きまして、羽生謙吾様からのご投稿です。

私の祖父が、昭和五十一年十一月十八日に碌山美術館を訪ねた際の写真に横山拓衛さんが写っています。アルバムには「わさび田と穂高川」とあり、横山さんが自転車を押しながら案内くださったようです。当日は穂高温泉の町営しゃくなげ荘に宿泊しました。また祖父の旧宅には「横山拓衛作」のサインが入った木彫の椅子が残されています。祖父の戦友だった笹村さんとのご縁だと思います。

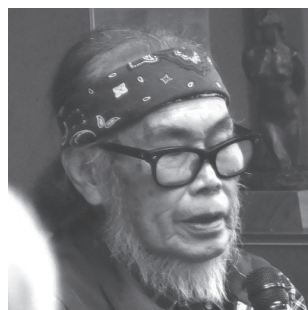
以上でございます。このご投稿は回覧いたしますので、気になった方はお読みいただければと思います。

それではこれからいろいろな方々から、思い出話をいただきたいと思うのですが、どなたか口火を切ってくださいる方はいらっしゃいますか？ では小林さんをお願いしてもよろしいですか？

小林…はい。

武井…ではお願いいたします。

小林…こんにちは。小林と申します。商売は花を栽培してましてね。この繋がり昭和三十三年の開館の頃から、いろいろの関係でもって携わっています。



その昭和三十年代後半から四十年代のこの美術館の雰囲気についてののはなんかちょっと今と違いますのでね、お話ししておきます。その時代はね、もちろん時間があれば鍵を閉めちゃいましたけどね、この庭には自由に入れたんですよ。で、ここにその深山軒という木曾の水車小屋を移築した五、六坪のちっちゃな小屋がありましたね。それでちょっと変わってまして、このグズベリーハウスにも似てるんだけど、破風とかが屋根の周りに付いてましてね。で、その上に、白樺の皮を剥いたのを裏返しにしてね、その上に平らな石を乗せたんですよ。

そしてその何て言いますかね、その時代は幹事制度と言っていますね、幹事が何人もいました。でその幹事が一人責任持つとね、その深山軒は自由に使えた時代があったんですよ。本当に何て言いますかね、気楽な時代と言いますかね。だから全く部外者でも、その幹事一人が責任を持つとね、庭から深山軒に来て、そこでお茶を飲んだり、場合によっては一杯飲んだりとかね、それもできたんですよ。そういう時代背景があつて、そういうちよつと今と違った雰囲気があります。そういう背景の中でもって、何て言うんですかね、いろんな人と交流ができていたんですよ。

そのうちに時代が変わっちゃいまして、塀ができた、早く門が閉まったりしましてね、ちよつと雰囲気が変わっちゃいましたけどね。で、私が横山さんとお会いしたのは、昭和三十年後半から四十年代なんですけども、今から六十年くらい前ですかね。もつと前になるかな。で、横山さんは本当に器用な方でしてね。

この小屋があるでしょう。この小屋にも大きな骨がありますね。で、横山さんはその重いものを簡単に移動させるんですよ。重いものを動かすのが上手って言いますかね、長けてましてね。この骨組みなんかも本当に、柱一本立てて簡単に。ブロックでもってね、骨組みしちゃうんですよ。で庭に据えてある大きな石があるんだけど、それなんかもみんな横山さんがやったもんですよ。で、ここに皆さんが座ってる椅子があるでしょ。これもほとんど横山さんが手掛けたものですよ。で、そういう中で私はよくここに仕事した後飛んできましたね。横山さんっていうとちよつとお酒飲んでましたかね。そういう中で。一番私驚いたのはね、横山さん若い頃、山行つて重いものを運び出すとか、そういう仕事をしてみたいだから、キノコなんかについてもすごく詳しくてね。私一番驚いたのは、とてもこれが食べれるとは思えないようなキノコを持ってきて食べさせてくれるんですよ。えつと何て言ったつけない、アカリコと言いましたね、本当に大きなこの三〇センチまでの大きな傘になりましてね、ちよつと裏側が黄色っぽいような色なんです。それをそのなんて言うんですか、鶏の脂身と煮るとすごく美味しくてね。それをよくいただいた記憶がありますね。

その他にも色々ごめんなさいね、頭の中こうごっちゃになってまして、私今八十六になつてるもんですからもう頭の中がちよつと混乱してましてね、あ、そうだ。皆さん『パンとあこがれ』を覚えてますか？ 確か民放かなんかでありましたよ。相馬愛蔵と黒光を主人公にした。他にも相馬愛蔵、黒光のことを書いた小説『俚譜薔薇来歌』もありましたよ。ね。

その『パンとあこがれ』で黒光さんの役をやったのが宇津宮雅代って言いましたっけ？ 相馬黒光さんによく似てるんだけどね。宇津宮さんご存知ありませんか？ 宇津宮雅代という俳優がいます、ちよつ

と有名な女優さんだったんだけどね。で、ここへ遊びきまして、横山さんがすごく好きになっちゃいましたね。もう何回も来てましたね。で、横山さんすぐ芋汁を作ってくれましたね、芋汁をよくご馳走してやりましたね。で、芋汁ってこうちょっと触るとか痒くなるでしょ。でその綺麗な方がちょっと首なんか触ったみたいでして、搔いてるのを横山さん見てこうにこっと笑ったような記憶がね、ちょっとありますけどもね。そんなことがありましたね。

で、もう一つ、笹村草家人先生を皆さんご存知ですよ。で、笹村先生をすごく慕ってましてね、横山さんはね。で、私よくシクラメンをその頃はいっぱい作ってまして、っていうのは、時代はとにかく昭和三十九年東京オリンピックの前後ですけどもね。ここを夕方発って、そして、東京にそうですね十二時一時からに着きましたね。で、各市場に花を配ってたという時代があります、その時代に、笹村草家人は山梨県の尾続という山の中ですけどもね、上野原駅から歩いて三、四時間くらいかかるのかな、そこに、ちょっとと似てるんですけどもね、こういう雰囲気のお家があります、そこに住んでたんですよ。で、横山さんは野菜とか色々持って、一緒に東京行くんだったら乗せてってくれよって言ってね、そして、上野原まで一緒に行きましてね。そして、上野原で降りて、ゆっくり歩くとちようど良いつて言って先生のうちまで歩いて行かれたことがありましたね。

それとかね、ああ、そうだ。草柳大蔵さんの話もしますが、さつきお話ありましたけども、草柳先生はよくね、スコッチウイスキーの、赤ラベルを持って来たんですよ。私もちょっといただきましたけどもね。黒ラベルと赤ラベルってありまして、ご存知ですよ。今でこそ三、四千円で買えますけどもね。その当時黒ラベルが八、〇〇〇円とか九、〇〇〇円、ちょっと高いと一二、〇〇〇円くらいしたんですよ。で、僕らの

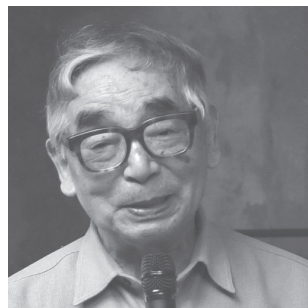
給料が、月給が一二、〇〇〇円くらいの時ですよ。やっぱその草柳先生でも、一二、〇〇〇円は高いと思っただけでしょうね。それは僕が思ったわけじゃありませんけども。先生は赤ラベルを持ってきましてね、それを一緒に飲んでましたね。そういう記憶があります。いろいろごめんなさいね。こう前後しちゃうんだけど。いつもここに来るとね、仕事なんか疲れてくると、横山さんがそこにいますね、「やあ」てな形でもって色々手作りのものを作ってくれましたね。それもそうですね。こういう椅子も全部、横山さん作ってましたね、はい。

もうひとつありました。スズキメソッドの子供たちがね、よくここへ来てましたね。彼らその楽器を持ってくるもんですからね。ここでヴァイオリンを弾いたり、ヴァイオリンを弾いたりしてね。すごくこの響きがいいんですよ。で、ここに大きなテーブルありますよ。そこで私とテーブルワインなんか呑みながら、横山さんと一緒に見たとそんな記憶がありますね。だから本当によく僕ここにきていましたよ。

その全く今と違うのは、その気楽に時間外でもいつ来てもたいがい横山さんがいるもんですからね。その特異な時代と言いますかね。とても今では考えられないような時代だったと思いますね。そんないっぱい色々ありますけど、ごめんなさい、こんな程度ですけどもね。ありがとうございます。

武井…小林さん、どうもありがとうございます。では続いて中村石浄先生にちよっとお話をいただきたいと思えます。よろしく願います。

中村…さてきて。皆さん、こんにち。横山拓衛さんを偲ぶ会だということで、私、こうして皆さんと一緒に、彼を偲ぶことを大変嬉しく



りございました。

昭和四十七年の春ですけどね、その年の校長先生がね、大変個性のある先生で、四月に職員室に入るや否や、校長室に呼ばれて、中村これから碌山美術館へ挨拶に行くぞ。そう言うんですね。じゃあそうかって付いて行ったら、道ながら、碌山美術館に行くけども、碌山美術館には、えらい男がいるぞと、館長とは言わないんです。名前も言わない。で、その当時はまだ本館があるだけでした。本館の入り口に受付がありましたね。そこに、いがぐり頭の男が一人いて、半分寝てるのか受付やってるのかよく分からなかったんだけども。

そして校長が「いや、横山さん、今度中学へ来た、絵の先生だ、頼むじ」なんて言ってます。それが横山拓衛さんとの最初の出会いですね。その校長さんは腰原利由って先生ですけどね、「中村いいか人間ってものは見た格好でもって評価しちゃいけないぞ、人間は格好じゃねえぞ」。俺だってそんなことは知ってますよ。当たり前のことをお説教みたいに言うなと思いながら、校長に付いてきたわけです。

その横山拓衛さんの第一印象は、丸首シャツのね、素朴な顔、日に焼けて真っ黒な。本当に何て言うかな、この安曇の土から生まれてきたよいうな、そういう風貌でした。だけど、なるほどなど、だんだん納得し

思っております。私が隣の穂高中学校に赴任したのは、中学校の美術教師の三校目でした。穂高中学校に赴任できるって

ことは、誇りなんです。なぜかと言えば、碌山美術館が隣にあること。碌山美術館と一緒に色々行事もしたり、庭の掃除もしたり、そういう関わりがで

てったんですが、それで横山さんも私のことを、多少だんだん理解をしてきて、親しく声をかけてくれるようになったんですがね。

その当時はちょうどね。昭和四十七年と言っても、まだ戦後の雰囲気はまだ残ってる、そういう時代だったと思いますね。さつき、小林功さんの方から話がありましたけども、彼のおうちの仕事はね、運送、牛や馬、主に馬を引いて山へ木を引き出しに行く、そういう土引きの仕事が多かったと思うんですが、それで時々と彼は細々と「いや、中村先生、今は車があつて便利でいいね」と。「馬はそうはいかぬえ、一回足を折っちゃうともう駄目だ。殺して食っちゃうしかしよがねえ」と、そういう寂しそうな声も時々出していましたね。結局、その横山さんは、さつき話がありましたけど、この美術館を作る時に、東京芸大のね、先生が中心になって、中でも石井鶴三先生の下に、笹村草人っていう助教授の先生がおられました。その先生が中心に、ここはこうだ、ここはこうしろっていうことで。上野原の雨のもるような小屋に住んでいて、大体ペンネームがそうだもんね。笹村の草人です。草人ってことは、草の家の人だからね。だから、お風呂なんか、ガスも何にもない。暮らしても一度、腰原先生と伺ったことあるんだけど、ちょうど雨が降っててね、雨漏りするんです。雨の漏ったところへなんか置いて歩くのが奥さんの仕事でね。で、お風呂も全部谷川の水を引き込んで、それを火で沸かしてね。実際のそういう自然の中の人間としてこう、生きてる。そういうことを本当に実践された先生でありましたね。

だけど、笹村先生はいろんな面でいろんな難しいこと言う。色々問題も抱えた先生でね、それはまあ個性と言えれば個性なんだけど、だからこのグリーハウスも、たまたま彼が好き、スモモ？ 小林さん。あれグズベリーって何ですか？

小林…スグリですね。

中村・グズベリーが好きで、それを植えたことによって、このハウスのことをグズベリーハウスって名付けて。大変いいなと思ってますけどね。そんなわけで、ここにはストーブが燃えてますけどね。こういうストーブもなかなか今、どこの学校行ってもこのストーブを焚いている学校はどこにもございません。これ今木を焚いてますけど、それこそ昔は薪が燃料で、村の人が山へ行って木を切って、薪にして、一年分の薪を学校の周りに積み上げて、そういう生活でしたね。それが石炭になり、今は石油になり。これも最高の伝統ですよ。本当にありがたいことです。

それで今、皆さんがお掛けになっている、その椅子ですよ、これもさっき話がありましたけど、当時有明の方に林友の工場ができましたね。そこでカナダの米松を安く仕入れるんです。リヤカーを持って行ってね、まだ生木の米松をリヤカーにつけて、こんな厚い板を。材料としてはそんな高いもんじゃないけども、今こうして三十年四十年五十年経ってもですよ、皆さんで磨き上げた。これはね、一日や二日でもってできる仕事じゃないですよ。これはもうまさに横山拓衛さんが作った一つの芸術作品ですよ。この椅子はあと五十年、百年、ちゃんとこのグズベリーハウスで生きていく、そういう作品でございますね。だからそういう点で、本館にある、碌山の彫刻に匹敵するだけの私は価値があると思っております。そんなわけで横山さんは、結局、自分を飾らないんですよ。本当に。自分のあるがままに生きたいように、そしてその真剣に生きる。だからこれほど大勢の方に慕われるんですよ。

だから、笹村草家人も惚れ込んで、横山さんの素朴な純朴さに打たれて、ああいう木が欲しい、ああいう石が欲しいって、いろんなことを頼んで、横山さんもそれに応えていた。だんだんやっぱしね、草家人の持つてる、本質的な良さというかね、その美に対する考え方っていうのは、だんだん分かってくるんだよね。

このグズベリーハウスの床は今立派なレンガになってますけども、最初はこれね、二〇センチぐらいに切った木を割ってね、で、それを全部敷き詰めてあったんです。これがまた良かったんです。ちょうどNHKドラマ『水色の時』を契機にね、大勢の方が、もう庭から展示室から、観光客の人でもって埋まるぐらいに、それは大変な時があったんです。横山さんは、そういう様子を見て、あんまり人が大勢来すぎちゃって、俺のいる場所がないやって、残念がっていた時もありましたけどね。だけど、今さっき枕木の話をしましたけど、その割り方一つにもね、どういう形がいいか、どう使うか、せっかく集まった先生たちが考えて割っても、笹村草家人先生は実に勝手な人で、ああこれは駄目だ、これは使える、これは使えねえって言うってこう、簡単には弾かれたんですね。そういう様子を見たり、この屋根の上にも。さっき言われた、白樺の皮を挽いてね、その上に石を乗せたんですよ。その石の選び方も、子供たちが、烏川へ行って石を拾ってくる。で、これはいい石だ、これは駄目だ。これは使えねえって言うって、せっかく子供たちが苦勞して拾ってきた石をね、これは駄目だって簡単にやっちゃうんですよ。そういう点かね、なかなかその、せっかく子供が拾ってきたものにそんなこと言う先生は、俺は駄目だなと、思いましたね。

だけど、我儘だからこそこういう、個性的なものが生まれるんですよ。窓の木枠もそうですけど、あれだって先生たちと蚤一丁でもってみんな穴開けて彫ったもんですよ。上手には彫ってないけども、その荒っぽさがまた素材で良いんですよ。

それで穂高中学校で一番印象に残ってるのはね、笹村草家人のお葬式をやったんです。この時はまだ腰原先生が元気な頃で、PTAも総動員。それで、東京からも何人か東京芸大の先生たちが来て、こうしろあしろっていうようなことを言われたと思うんだけど、今日お見えのアルプ

ガーデンの小林さんもね、お花を明日までに用意しろというようなことをね。小林さん、菊の花は何千本だった？

小林…三〇〇〇本でしたね。

中村…そのお葬式の日ね、体育館っていうのはそのステージがあるでしょ。そのステージの上と下との境を無くしてね、それを全部花で埋めたんだよね。そういう指示を急にその芸大の先生が言い出して、それで一晩に花を三〇〇〇本も集めさせられて、その中には横山さんも入ってたと思うんだけどね。そんな苦労もあったわけです。

その笹村草家人は本当に横山さんを大事にして、芸術的な面も育ててくれた人ですね。だからそういう仲でもって「先生、山行って雨に降られて仕事ができない時に、こんな民話を書いたわい」って言って、先生にお見せしたんですね。でそれが『なまくら観音』の民話なんですよ。池田の山の上に広津っていう地域が今もありますけどね。その広津の日影という集落に小学校もあったわけでございます。その公民館の裏の墓地にそのなまくら観音の像があるんですが、今日は私の方で用意した写真をご覧いただけますけども。今は小屋ができてましてね。なまくら観音の祠というかお堂ができてるので、大変良いことだなと思っております。

ですから、横山さんは笹村草家人の生き様を見て、自分なりにもの見方とか、考え方とか、どういふものが素晴らしいか、どういふものが美しいかってことを、自然に学んだんですね。

ですから、実家の前の写真もありますけど、亡くなって二十何回忌かな。あそこへね、笹村草家人とも関係した皆さんと、穂高中学の当時の望月さんっていう、PTA会長や先生たちとね、一緒に、横山さんを偲ぶ石碑を作りました。この石碑もだんだん良い雰囲気になってきてます。

横山さんが碌山美術館にいた頃、穂高中学もまだその当時はマンモス

校で、いろんな問題を起こす生徒もいたんです。でもね、碌山美術館に掃除に来て、最初は適当にぶらぶら遊んでるんだけど、横山さんに「ちゃんとやれよ」なんて優しく言われるとちゃんとやるんですよ。学校の先生が「おい、この野郎」なんて言っても、そういう連中は何にも言うこと聞かないんだけどね。横山さんが、軽く優しく言うと、ちゃんとやるんですよ。そうするとまた横山さんはね、中学生にラーメンを食べさせたりね、そんなことをしてね、大変仲良しになって、でそういう子供たちは、だんだんクラスでも暴れなくなってるね、本当にいい生徒になって、そういう点では、担任も大変助かったなっていうことを、いろんな先生たちから聞いております。

そんな意味でやっぱ人間っていうのは、何をもって接すればいいかね、そういうことを横山さんは無言で子供たちに教えてくれたし、学校の先生たちにも、大変いい影響を与えてくれたなっていうことを思っております。

最後に一つだけ。僕は穂高中学校のあとに塩尻の丘中学校に行ったんですが、ちょうど丘中にいる頃に、国道一九号線の塩尻の吉田に地下道ができてね、その地下道が暗くて殺風景でよくないからということ、当時の国土庁の方から依頼されて、全長二〇〇メートルの地下道の壁面に絵を描いたんです。その当時は丘中も随分荒れててね、クラスの中でも色々問題もあったし、そういう学校でした。

私は美術部の生徒を中心に、全校の生徒に呼びかけて、地下道に絵を描く面白いことあるぞと。絵を描ける夏休みに集まらなると言っちゃってね。それで中には、担任の先生が心よく協力するクラスと、全然見向きもしないクラスがあったりして、それが世の中だね。

そんなことで色々怒ってみてもしょうがないけど、協力してくれるクラスの人をお願いをして。ほんでやっぱ生徒ってね、エネルギーがある

ました。

今回もたまたま娘が図書館でチラシを見つけて私に知らせてくれたのですけれども、それで是非参加したいなと思って、今日伺いました。私の娘は、結婚してたまたま穂高に住むことになって、そのお婿さんに昔横山さんという方にこの笛を作ってもらったという話をしましたら、そしてら笛を入れておく箱を木をくり抜いて作ってくれたんです。そんなこともあって、ここで、横山さんとお会いしたことはすごい思い出だったなっていうふうに思っています。ありがとうございます。

武井：何か他にお話ししたいという方いらっしゃいますか？



荻原：皆さんこんにちは。私は碌山の生家を守っている荻原義重と言います。長い間ずっとこの碌山美術館とお付き合いをしているわけですが、横山拓衛さんともですね、時々会うことがあります。

私が今日話をさせていたきたいのは、横山拓衛さんと、草柳大蔵先生との関わりをちょっとお話をさせていたきたいと思っています。この美術館の西側には穂高東中学校があります。もう一つ、ちょっと離れたところに穂高西中学校があります。元々は一つの学校で、穂高中学校だったんですが、生徒数が増えたということで、当時二つの学校に分けることに教育委員会で決まっておりました。ちょうど私が勤務した時に、その閉校行事の中で当時の校長先生から「荻原、お前この旧穂高町の有名な人達をまとめた本を作りなさい」ということを言われて、学校勤務をしながら、本を編集させていただきました。それがこの

『孜々として』っていう本なんです。この中には是非、横山拓衛さんのことを入れろということで、題材をどうしたらいいですかと聞いたたら「それは草柳大蔵さんが書いた『主婦の友』という雑誌があるから、その本の文章を全部いただきなさい」ということを言われ、草柳先生と何回か連絡をして原稿をそのままいただきました。その時の『主婦の友』の内にある題はですね「この愛しきもの」でした。この愛しきっていうのは、愛することなんです。愛という字は、「愛しき」と読むということ、それを今度はこちらの本に入れる時の表題は「愛しき人・横山拓衛」という形となって。私もよく分からなくて、愛しきってどういうことですかって聞きましたら、草柳先生からこういうお返事をいただきました。「愛しきには、強く心に惹かれるというような意味合いがあって、あるいはそういう素晴らしい人を指して、愛しきと言うんだ」ということを教えていただきました。その冒頭の文章を少しだけ読まさせていただきます。タイトルは「自ら弾き、涙する信濃の国の歌」です。では読みます。

横山拓衛さんは財団法人「碌山美術館」の職員です。職員と言って、ワイシャツを着てネクタイをしめて、荻原碌山と相馬黒光の關係とか、碌山とロタンとの關係とかを、ひんやりする研究室で勉強している職員ではありません。いがぐり頭にTシャツを着て、だぶだぶのズボンを着き、ふだんは美術館の敷地の一隅にある「深山軒」にこもっている。「深山軒」といつたって木小屋である。開田村にあった水車小屋をもってきて建てた。そうなんです。横山さんは自分が「いいな」と思うものを、なんでも作ってしまうのです。この水車小屋は四畳半が一間、それに同じ広さの土間がついているところが廂の下には、梯子が横たわり、腕木には鉞や鎌が、柄をならべ、土間には「よき」(おの)が光っている、横山さんの道具の

すべてが結集している。

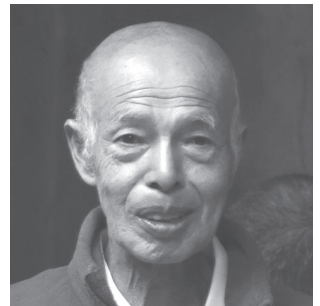
あとたくさんありますけれども、これが出だしですね。横山さんの人柄を全て表してるんじゃないかと思えます。その斧のことですが、先ほど皆さんが座っている椅子、実は私の家で、数年前、土蔵を整理しましたら、その椅子が出てきました。私には叔母がいて、この碌山美術館の副館長を長くさせていただきました。非常に碌山美術館を愛した叔母であります。その叔母にあてて、木の椅子を作ってくれました。それを数年前にこちらの美術館に寄贈させていただきました。そういう横山さんという人は非常に人から愛された、愛しいっていうのは愛されたっていうことじゃないかと思えます。そういう人柄ですね。

惚ばれるということ、今日ですね、そのストーブを囲んでるんです。そんなことを思い出して参加させていただきました。私も若いころここに来たら、ヤギを飼っていたり、笛を吹いたり、それから信濃の国を歌ったり、ちょっと面白いおじさんだなと当時は思ってたんですけども。だんだん私も歳を取って、横山拓衛さんの素晴らしい人柄を感得しております。どうも今日はありがとうございます。

武井…ここで家庭での拓衛さんはどんな方だったのかということ、息子さんの正身さんにお聞きしたいと思います。よろしくお願いいたします。

横山…こんにちは。息子の正身と申します。みんなに渡っている年譜から見たら私の知らない部分が多くあるんですけど。私の知っている、えっと父が三十三歳頃からの家での父をちょっと話してみたいと思います。

私が小学校一年くらいの頃からですけども。父は馬を使って、主に三



浦製材所の仕事をしていました。僕は田起こしとか頼まれた仕事をしていました。仕事から帰って焼酎呑むのが毎日でした。私は二日にいっぺん三合入る瓶を持って量り売りを買に行かされました。私が小学六年生頃だったと思いますけど、仕事で使っていた馬が足に怪我して、使えなくなっただけで手放せなくて、家で

飼って世話をしていました。その頃から笹村先生との出会いがあり、馬の首とか山の神を笹村先生が家で作っていました。そしてちょっとその間、私が関西の方へ就職したもんで、三年くらい飛びますけど。私が二十二歳頃家に帰ってきたころには碌山美術館の職員になっていました。家ではもう朝起きたらすぐご飯食って美術館へ行くとか、夜、家に帰ってこないとか、そんな時がありました。私がこの美術館へなんか用事で来た時になんかは、いい顔しないで、あんまりここへは来ておりませんでした。それで、その中で一度だけ、この美術館の仕事っていうかお手伝いで、田内さんっていう写真家の方が美術館で撮影する時に父に手伝ってくれて頼まれて、その時にここに来て夕方だけ夜に父と田内さんの三人で、美術館の本館の中で彫刻の撮影をやっていました。で、その時の撮影のお手伝いというのが、電球持ってこう当ててるだけなんだけども、でその後、深山軒で田内さんと父と三人で、北野食堂のソースカツ丼食べて、うんとそれが美味しく感じたのは今でも一番覚えております。何より、お酒が好き過ぎたようで、いつも酔っ払ってるような感じですね。

そんな思い出くらいしかありませんけど、そして亡くなって五十年過ぎてもこのように企画をしていただいて、美術館の方や中村先生はじめ今日

参加の方にお礼申し上げます。何よりの父への供養だと思っております。また色々なお話も聞けて、とてもありがたかったです。どうもありがとうございました。

武井：横山さん、どうもありがとうございました。

中村：やっぱしね、この安曇野にある礫山美術館はね、都会にある美術館とは実際ちよつと違うんですね。当時は横山拓衛さんがこの美術館にいて、庭で鑿やナタを振るっているんな仕事をする。そういう姿をご覧になった皆さんが、信州の田舎へ来て、素朴な美術館へ来て良かったなど。

横山さんのような方の姿を見ることはね、本当に素晴らしいことだったと思いますよ。今でもこのグズリーハウスも礫山館も昔のまんまですけど、こういう精神性の強い、本当に見る人の心に迫っていく、そういう人間的な深いものがね、ある面ではこう現代では疎かにされてきてしまっている。だからこれではいけないですね。礫山美術館を通して、横山さんの姿というものがね、本当にその地域や来館者の皆さんに、どんなに素晴らしい影響を与えてきたかっていうことをね、今日改めて感じました。

今日ご参加された皆さんはね、そういう点でまだまだ、礫山美術館に對する愛情を持って、横山拓衛さんの精神をこれからも、生活の中で活かしていこうという、そういう情熱に燃えている皆さん方だと思います。

武井：横山さんの思い出をお話ししたい方いらっしゃいますか？

竹内：すみません私が出て話をするようなあれじゃないと思いますけど、

実は、うちはこのすぐ隣に家を建てて生活していたので、その後この建物ができたわけですけども。いずれにしましても横山さんとは、十何年間ずつとお付き合いさせてもらっていました。非常に子煩悩な方で、子供なんかも喜んで遊んでもらえるような。顔は怖いような顔してましたけど、本当に優しく良い方だったと思います。

私がここに住んでいた時に、何か美術館も大きくしたいということ、現在のところへ引越したわけです。その当時のエピソードというのが少し可笑しくて、横山さんがまず口火を切って、竹内さん、この土地をなんとか立ち退いてもらえなえか。なんとか高く買うから頼むよなんて、そんなことがまずあったんです。その後、所四出男館長と、横沢正彦先生が二人で何回か足を運ばれて、とにかく譲ってもらえないかと、そういうようなことで。私も家を建ててまだ十五年早々だったんで、もったいねえし、とんでもない話だったということでした。この辺の地区の区長もやっていたもんで、この土地にも愛着があつて。だったらこの辺の住所で探してくれないかということで、先生たちも歩いて相当探されたんだけど、高くて、なかなか手に入らないということでした。竹内さん、顔も広いし、探してくれないかということで、ほいで友達の中でやっぱし不動産さんの友達がいます、ここはどうだって言ったのが穂高東中学校のすぐ西の今のところなんですよ。

そんなエピソードもありまして、私もここが好きだったので、離れたかねえなと思つたけど、そういう形でお譲りしますということで引越して、それで今現在があるわけです。

横山さんは非常にね、信濃の国もよく歌われていました。歌は好きだったし、それでよく音楽をかけて、亡くなる前の晩は私も一緒に杯飲んだ仲間なんです。まさか朝、警察が来ると思わないで、本当に切ない思いをしました。そんなことですいません。

武井・他にも横山さんのこんな面白いエピソードがあるよっていう方いらっしやいませんか？ それでは時間も三時を回りましたので、会を締めさせていただきますと思います。では館長より最後の言葉をいただきたいと思ひます。館長、お願いしします。

幅谷…皆様、長時間横山さんを語る会にご参加いただきありがとうございます。この横山さんも関わって建てたグズベリーハウスと、あちらの美術の倉なんですけれど、建設から五十年以上経ちまして、国の登録有形文化財に申請するお話を安曇野市からいただきました。ちょうど申請が終わったそうです。やっぱり笹村草家人の意匠が凝ったこちらと美術の倉は来館者にも人気がある建物です。

横山拓衛さんと、笹村先生のお力があって、今があると思ひます。これからも大事にして、ずっと維持管理していきたいと思ひます。今日は長い時間、横山さんを偲んでいただいてありがとうございます。今日はでは皆様、お気を付けてお帰りくださいませ。ありがとうございます。

た。



オルガンを奏でる横山拓衛

横山拓衛略年譜

ストープを囲んで「横山拓衛さんを語る」配布資料

(穂高中学校国語科作成(昭和五十九年)を基に作成)

	和暦	西暦	年齢	
	大正	一九二二		
	一〇	一九二二		父弥一(三十四歳)、母たか(二十五歳)の長男として岡谷市に生まれる。男のみの五人兄弟。父は運送業。
	一二	一九二三	二	岡谷市から穂高町(等々力の現在の家)に移り住む。小さい時から性格はおとなしく動物好き。体は丈夫で医者にかかったことがなかった。
昭和	三	一九二八	七	穂高小学校入学。遊びに夢中。本家に行き馬の世話をよくした。馬を好む。
	九	一九三四	一三	穂高小学校卒業。近所の三枝石屋に弟子入り。年季奉公。たいへん器用であった。
	一二	一九三七	一六	石屋を飛び出し、商売を覚えようと松本のマルシメへ勤める。
	一三	一九三八	一七	マルシメを辞め、穂高町の林家肉店に勤め、豚飼いに専念。
	一四	一九三九	一八	東筑、田村の請負師松沢さんのもとに働きに行き、土方の仕事を覚える。北海道まで仕事に行き、とび職の親方の世話になる。とても心細い思いをする。
	一六	一九四一	二〇	徴兵検査。背が低いため、背伸びをして甲種合格となる。

